

ACT III 「アルテラからの使い」

うーん、のびっ！

困った。なんでこの惑星はこんなにも退屈なのよ。もう3日間、毎日午後にテラスでお茶を飲む以外、これと言ってすることがない。

フェアリーはリュシーと勉強しているし、ユージはいつも出かけていていないし、この館の雑用をしている老夫婦は忙しそうなので声もかけられない。

あ、そうそう、この惑星でのあたしの能力が分かったんだ。というか、リュシーに教えてもらったんだけど。この惑星に伝わっているリユースというのは、空を飛び、矢を片手にドラゴンを打ち倒す黄金の少女として伝説化されているらしい。リュシーに見せてもらった本を元に試してみたところ、使える能力はテレキネシス、テレパシーだけ。テレポーテーション、透視などはまるで駄目だった。ただ、手のひらに乗るような小さい物ならかろうじて物質移動ができる。

ああ、もう嫌だ。こうやってのんびりしているとノイローゼになりそう。今日こそフェアリーを引っ張り出して何とかしてもらわなきゃ。

その時、馬らしい獣が走ってくる音が響いてきた。あたしはテラスから音のする方向を眺めた。しかし、森の木々が邪魔をして音の主が何なのかまったく見えない。あたしは目を閉じて音のする方に触手を伸ばしていった。

男が一人…、馬みたいな馬じゃない獣に乗っている。どうやらここへ来るつもりらしい。それが何のためで、この男が何者なのかはいまいちよく分からない。でも、そんなことはどうでもよかった。この退屈な気分を紛らわしてくれるなら、それがどんな悪魔だって歓迎してあげるわ。

「開門！開門！」

そうこうするうちにこの男は館の前にたどり着き大声で叫んだ。一瞬の間の後、リュシーが門を開けて出迎えた。

「アルテラからの使いですね。どうぞ、お入りください。」

「貴様は…、あ、いや…。」

男はリュシーの顔を見るやギョツとした表情を作ったが、すぐにその場を取り繕って館の中へ入ってくる。リュシーも澄ました顔をしているということは、あえて事を荒立てるつもりはないということね。

あたしはいても立ってもいられなくなって階下へ降りていく。ちょうどユージがお茶を持っていくところで、あたしはユージと一緒に祭壇の間に入っていった。

「あら、ちょうど良いところへ来たわ。彼女がリユース・リア・フラウよ。タリスも名前ぐらいは知っているわよね？」

フェアリーは一段高いところにしつらえた豪華な椅子に腰掛け、その横でリュシーが立っている。タリスと呼ばれた男は、その前で膝まづいたまま顔だけこっちを向けた。

「はい、よく存じております。」

ふーん、フェアリーがその名をいとも簡単に出したところを見ると、この男は以前から知った顔ではあるんだ。しかし、その表情から受ける印象はあまりよくない。

「ところで、お父様、お母様は元気？」

「はい、それは、もう…。で、実は今日この館に私が来た目的ですが…。」

「何なのよ？」

「王がフェアリー様に一度アルテラに来ないかと申されまして…、これがその書簡でございます。」

男は懐から円筒を取り出しフェアリーに差し出す。それをリュシーが受け取って、フェアリーの手へ。

「お父様がねえ…。」

フェアリーは円筒から手紙を取り出して読み出す。その表情から明らかに乗り気ではないのが分かる。

その時だった。何だか分からないビリビリしたイメージがあたりを貫く。

「キャーッ！」

裏庭の方から聞こえてくる…、あれは老夫婦のおばさんの声。

「どうしたんだ？」

男とフェアリーが反射的に顔を上げて、ユージはもう走っている。あたしも一足遅れて走り出す。途中で面倒くさくなって浮いてしまう。

ユージとほぼ同時に館の裏へ出た。おばさんが壁を見て座り込んでいる。

「おばさん！」

「これを…。」

壁には赤いペンキのようなもので大きく見たことが無い記号が三つ描かれている。この国の文字なのか、もしかしたら何か別の記号なのかもしれない。どっちにしてもおばさんの様子を見る限り、あまり良い意味には使われなさそうね。

「ひどい…、誰がこんなことを…。」

少し遅れてきたフェアリーが、その記号をみた途端に固く唇を噛んだ。怒りのためなのか身体が小さく震えている。

「これ、どういう意味なの？」

そっと小声でリュシーに訊ねた。

「滅びの呪文です。こんな風に使われることはまずないのですが…。」

リュシーはしきりと考え込んでいる。

「ユージ、すぐ消してちょうだい。」

フェアリーはそれだけ言い残すと踵を返して館の中に戻っていく。

ユージはといえば、あたし達が呆然と滅びの呪文を見ている間に、おばさんを館の中に運び込み、ベッドに寝かせつけていた。そして、モップと水の入ったバケツを持って戻ってきた。

「さあ、私達も戻りましょう。ここはユージーンに任せて大丈夫。」

「ええ。」

あたし達が祭壇の間へ入っていくと、ちょうど使いの男がフェアリーに暇乞いをしているところだった。

「あら、もう帰られるのですか？」

「もう用事は済みましたゆえ。何か騒ぎも起きた様子。これ以上ここにいても邪魔になるだけでしょうから…。」

話しをしているのはあたしとなのに、やたらとリュシーのことを気にしている。

「では、フェアリー様…。」

「ん、ご苦労だったわね。お父様とお母様によろしく言ってちょうだい。」

「必ずお伝えいたします。」

使いの男はフェアリーに深々と頭を下げると、下がりながらリュシーとあたしにも形だけ頭を下げた。暫くすると馬みたいな獣の鳴き声と蹄の音とが聞こえて、それがだんだんと遠くへ消えていく。

「なんか感じの悪い使いね。」

「どうせ命令でここに来ただけでしょうから。それにアレン卿の兵士だし。」

「アレン卿って？」

「お父様の弟。お父様の留守をいいことに、このアルテの国を狙っているのよ。」

左手の親指の爪を噛んでキッと宙を睨みつける。その姿にオレンジ色のオーラがまわりついているのが見える。

「で、どうするの？アルテラまで行くの？」

「ううん、ここを留守にすれば、それはアレン卿の思う壺だもの。と言って使者を立ててもお父様は納得しないだろうし…。」

フェアリーはあたしを見る。あたしは反射的に目をそらしてしまった。なあんか嫌な予感がする。」

「ねえ、あなた、あたしの代理ってということで、お父様に会って来て下さらない？」

「や、嫌あよ。なんであたしがそこまでしなきゃいけないのよ。第一、たった今、使者を立てても納得してくれないって言ったばかりじゃない。」

「あたしにいい考えがあるのよ。」

そう言いながら、グルッと周りを見る。一瞬見せた笑顔が妙に怖い。

「そのいい考えとは？」

リュシーが興味を示したようでフェアリーに訊ねる。

「リュースに単独でアルテラ王を訪ねて欲しいの。あたしの使者としてではなくね。そうすればお父様はきっとあなたに会うわ。王宮の中に入ってしまえばあとは好きに行動できるもの。頃合いを見計らってあたしの書簡を渡してくれれば、それで任務完了って訳。」

「本当にそれだけで済む？」

「あら、当然アレン卿の妨害はあるものと思わなきゃ。そうね、ひよっとしたら命を狙ってくるかもしれない。」

「フェアリー！」

あたしの命が危ないっていうのに、フェアリーったら楽しんでいるようにしか見えない。まったく…。

「だけど、おとなしく殺されるようなリュース・リア・フラウじゃないって訳よ。」

「他人事だと思って…。」

「信用しているのよ。できたらアレン卿の企みも公にしたいところだけどね。」

「欲を出しすぎよ。分かったわ、その辺のところもう少し話を聞かせてよ。情報もないのに動くのは経験上したくないから。」

「え、本当に行ってくれるの？」

「その代わり条件を付けさせてもらうけどね。」

「条件って？」

「それは後でね。」

どうして行く気になったのかはあたしにもよく分からない。好奇心が働いたせいもあるけど、それだけじゃないのは確かだから。ひょっとして、またフェアリーにうまく乗せられただけかもしれないけどね。

どっちにしても行くことになったんだ。できるだけ暴れて、この溜まったストレスを発散させないとね。

ACTⅢ 「アルテラの使い」

S62. 13. OCT <<H20. 28. DEC>>